

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

シンガポールのムスリム女性にとってのトゥドゥン

市岡卓 (法政大学大学院博士後期課程)



トゥドゥンを着けたシンガポールのムスリム女性たち (筆者撮影)

トゥドゥンで髪を覆ったマレー人女性の入国審査官に見送られ、クアラルンプール国際空港を後にする。1時間後、黒い髪を見せたマレー人女性の入国審査官が、シンガポールのチャンギ空港で迎えてくれる。シンガポールでは、入国審査官など制服を着用する公務では女性はトゥドゥンを着けることは禁止されているのだ。

「トゥドゥン」は、ムスリム女性が髪を隠すために頭から首までを覆う布である。世界的にはアラビア語の「ヒジャブ」が広く通用するが、マレーシアとシンガポールではマレー語の「トゥドゥン」が使われることが多い。

シンガポールでは、1970年代以降、ムスリムの宗教意識が高まる「イスラーム復興」が進み、トゥドゥンが広まった。現在では、確実に半数以上のムスリム女性がトゥドゥンを着けていると思われる。トゥドゥンの着用が宗教上の義務かについては議論があるが、多くのムスリム女性が、「よいムスリム」になるための宗教実践の一つとしてトゥドゥンを着けることを選んでいる。バラエティ豊かな鮮やかな色のトゥドゥンをまとった女性が連れ立って歩いている様子は目にも楽しい。

宗教意識の高まりによりトゥドゥンが広まった点では、シンガポールもマレーシアと同じである。しかし、シンガポールではトゥドゥンの社会的な位置づけはマレーシアとは大きく異なる。公立学校の生徒や公立病院の看護師、警察官、入国審査官などの職種では、制服の規則上、トゥドゥンの着用は認められていない。

シンガポールでは、華人が多数派(人口の約74%)だが、1950～60年代の民族紛争の経験などから、すべ

での民族・宗教の平等を保障する「多人種主義」を標榜してきた。しかしこれは、未然に紛争の芽を摘むために、「バランス上の配慮」を理由に、民族・宗教グループからの様々な要望を抑制するものであった。ムスリムからはトゥドゥンの規制見直しの要望が寄せられてきたが、政府は「宗教間のバランスに配慮し、公的な場での宗教の表出は抑制すべき」との立場を崩していない。

特に、2001年に9・11テロ、シンガポールでのテロ未遂犯の拘束があり、ムスリムの宗教意識の高まりを過激主義と結びつける華人の懸念に配慮して、政府は2002年から公立学校でのトゥドゥンの規制を徹底した。しかし、国会では議長を含め数名の議員がトゥドゥンを着け、また、公立学校でも教師はトゥドゥンを着けられるため、規制は不合理だとの議論もある。13年にも規制見直しを求める運動がネット上を中心に広がったが、政府の立場は変わっていない。

トゥドゥンを抑制しようとするシンガポールの社会状況は、政治・社会のイスラーム化が進み、一部の州でトゥドゥンの着用が義務づけられるなど、トゥドゥンを着けさせようとする圧力が働くマレーシアとは対照的である。シンガポールのムスリムの中には、少数派(人口の約15%)の自分たちの要求は通らないという不満の声もある。

世界でイスラーム過激主義によるテロが増加する中で、シンガポールでもトゥドゥンを着けたムスリム女性への嫌がらせや就職差別が増えており、過激主義と本来関係のないトゥドゥンがイスラームに対するネガティブなイメージを背負わされる状況がある。トゥドゥンはムスリム女性にとって宗教実践の一つに過ぎないが、人目を引く外観からも、当事者と異なる意味を他者から付されてしまうのである。

< 著者紹介 >

1965年生まれ、三重県出身。法政大学大学院国際文化研究科博士後期課程在籍。修士(国際文化)。専門は国際社会学およびシンガポール地域研究で、シンガポールのマレー人に関わる社会問題について調査研究を行っている。主な論文に「シンガポールにおけるムスリム女性のヒジャブの規制をめぐる考察」『マレーシア研究』第5号、2016年ほか。